The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Historical Development and Metaphorical Extensions of Surging Water Expressions :With Special Reference to Weallan and Wyllan in English Works
Author(s)	髙森, 理絵
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72223
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　髙　森　理　絵　）	
論文題名	Historical Development and Metaphorical Extensions of Surging Water Expressions: With Special Reference to *Weallan* and *Wyllan* in English Works （水の噴出表現の歴史的変遷とメタファーによる意味拡張： 英語作品における*Weallan*と*Wyllan*を中心とする分析）

論文内容の要旨

本論文は、英語作品における液体の噴出を認知基盤としたメタファー表現について、通時的観点から調査を行い、意味拡張の変遷を辿ることを目的とする。本論文で取り扱う液体の噴出表現は、古英語の自動詞*weallan*およびその名詞形*wylm*, 他動詞*wyllan*およびその名詞形*wylle*を中心に、共起語や文脈の詳細な解釈から、字義通りの意味と複数に派生する概念における噴出・流動表現を分析する。水の噴出表現が複数の意味領域に派生し用いられる代表的作品に、古英語叙事詩*Beowulf*が挙げられる。本作品において「逆巻く水の動き」が、「炎」や「感情」、その他の比喩へ転用されることについては、Potter (1988: 191)が、これらの*wealln*と*wylm*で表される表現を‘tidal metaphor’として先行研究にまとめている。この気づきをもとに、*Beowulf*を含め、the Anglo-Saxon Poetic Recordsに収録されている全作品を調査対象とし、古英詩全般における「水の噴出・奔流」の意味拡張について体系的に明らかにする。「水」の概念における「液体の流動」が複数の概念へ拡張することについて、時代ごとにその特徴を有すると考え、古英語から中英語、初期近代英語作品へと通時的調査を行ったことも、先行文献からの発展的研究である。また、近年では、中世英語作品における文体を認知言語学的アプローチから分析する研究が行われており、Trim (2007)では、850年から950年にかけて、ラテン語派生の借用語におけるthe ANGER IS SWELL metaphorからthe ANGER IS HEAT metaphorへの概念化の歴史的変遷について述べており、Izdebska (2015)では「怒り」に関する感情表現が、中世英語における文化や言語においてどのように概念化されるかを示している。このように、本研究においても、水の噴出概念（根源領域）そのものの歴史的変化と、複数の概念（目標領域）への意味拡張の通時的変遷について、認知言語学の概念メタファーの観点から考察することで、中世英語学研究と認知言語学の懸け橋となる研究を目指す。

本論文の構成は、全5章からなり、まず第１章・序説で、研究の目的、方法、調査対象表現の通時的変化の概要を述べる。

第２章では、古英語における水の噴出表現とその意味拡張について調査内容を述べる。始めに述べたように、本研究の出発点として、*Beowulf*における水の噴出表現は、龍の炎、血の沸き返り、拍動する心臓、悲しみや怒りの逆巻き、迫り来る死など、複数の概念に拡張して用いられる。同作品中で、自動詞*weallan*が19例、その派生名詞*wylm*がが19例用いられている。自動詞で特徴的な構文に以下の例が挙げられる。

(1) a. X nom. + Y instrumental dat. + ***weallan***　e.g. *geofon yþum* ***weol*** ‘ocean with waves **welled**’ (515b)

b. CONTAINER + in + ***weallan***　e.g. *hreðer inne* ***weoll*** ‘heart within **welled**’ (2113b)

(1a)は、「海が波で湧きかえる」こと意味し、同じ構文が８例用いられている。具格の*yþum* (with waves)は、「水（海）」の概念の他に、「血によって」沸き返る様子や、「呼吸」による胸の膨らみ、「激しい敵意」の湧きかえり等の表現を用い、複数の概念に拡張して用いられることがわかる。(1b)も同様で、「心の中の逆巻き」を表す感情表現であるが、心の容器である心臓 (*hreðer* ‘heart’)の他にも、胸 (*Breost* ‘breast’)が用いられ、古英詩においても感情を表す容器メタファーが用いられていたことがわかる。自動詞*weallan*から派生した名詞*wylm*は、２語からなる複合名詞で用いられる。

(2) a. X nom. ***wylm***　e.g. ***sæwylmas*** ‘sea **wellings**’ (393b)

b. X gen. +***wylm*** e.g. *wæteres* ***wylm*** ‘water **surge**’ (1693a)

(2a)のように、2語から成る基礎語の*wylm*を修飾する限定詞が、「水（海）」に関する語以外にも、「火」や「感情」概念の語が湧き立つ動きを特徴づける例もある。このように、古英語において、字義的な「海の波の逆巻き」の動きのイメージに基づいて、他の概念（e.g.「戦火」,「動揺」）を表す2語から成る複合語を、ケニング(‘kenning’)と呼ぶ。同作品においては、(2a)の複合語が12例、(2b)の「属格＋名詞」表現が7例みられる。古英語の「水の噴出」の特徴は、「海の波」のような激しい逆巻きを表すのが特徴であるため、火の概念では「龍の炎・戦火」、感情概念では死別などの「嘆き・悲しみ」に用いられる。このように、*Beowulf*に端を発した「水」から複数概念への意味拡張の分析を、さらに発展させるため、The Anglo-Saxon Poetic Records（以下ASPR）に収録されるその他全ての作品について、同様

の分析を行う。古英語作品においては頻度が低いものの、他動詞も出現するため、*wyllan*およびその派生名詞*wylle*も新たに調査対象とする。*OED*によると、他動詞*wyllan*は、自動詞*weallan*と異なり古英語由来の語ではなく、同族言語の古ノルド語由来の可能性が述べられている。主に、熱で沸かす‘boil’の意味を表すが、ASPRでは殆ど用いられていない。一方、名詞形の*wylle*は、海の波より小規模の‘wellspring (泉の湧き立ち)’を表し、Cynewulf作品やCædmonian一派の宗教詩において、徐々に使用されるようになる。宗教詩において自動詞*weallan*は、叙事詩と同様に「水」の湧き立ちが「火」に拡張するが、作品背景の影響から、地獄の炎や、魂の精錬の炎を表す表現で用いられる。作品ジャンルの違いから、「感情」表現において、英雄叙事詩では戦いにおける死別の悲しみや敵対する者への怒りを表したが、宗教詩では地獄の悲しみや神への愛を表している。

第3章は、中英語における分析で、自動詞の語形は*wallen*および派生名詞*walm*に、他動詞の語形は*wellen*および派生名詞*welle*に変化してゆく。水の噴出表現は、他動詞化（“transitivation”)という現象から、他動詞およびその名詞形の頻度が増加し、自動詞用法は減少の傾向となる。特に、他動詞の名詞用法の増加に伴って、古英語期に中心的用法であった自動詞*weallan*に基づく「海の荒波」のイメージから、「泉の湧き立ち」へと水の噴出規模が縮小化することとなる。本章では、the Early English Text Societyに収録される作品中、*wallen*および*wellen*、これらの名詞形が用いられている作品を調査したところ、54作品で用いられていることがわかった。中英語作品の特徴として、キリスト教の精神を反映した騎士道作品 (Romances)が多く描かれ、年代記(Chronicles)においても同様の特徴がみられる。古英詩において王朝の栄枯盛衰の中奮闘する英雄の姿と比較すると、新たな時代を反映した騎士の姿である。このような作品背景から、騎士道精神の湧き立ちとして、‘well of knighthood’や ‘well of worship and honor’などの「精神」概念への意味拡張もみられるようになる。宗教作品においては、他動詞化の影響からKatherine groupなどの殉教者を描く作品において、釜茹での拷問の場面を他動詞*wellen*で表すようになった。宗教作品における他動詞の頻度については、「水」の湧き立ち（全36例中2例）よりも、「熱」による沸き立ち (全36例中15例)のほうが多く用いられ、*wellen*によって拷問や地獄の沸き返りが宗教作品の象徴的場面を描いていることが見て取れる。

第4章は、初期近代英語における分析で、自動詞・他動詞、これらの名詞形ともに、語形が*well*に統一される時期である。1600年代に入り欽定英訳聖書の翻訳がなされ、水の噴出表現にも新たな変化がみられる。聖書における*well*は、泉の湧き立ちだけでなく、聖人の名に因んだ井戸も表す。むしろ、欽定英訳聖書における「水」の概念の例において、28例中25例が、この人工の井戸であるため、中英語期の「泉の湧き立ち」から、さらに静かな奥底に潜む静的な動きへとイメージが変化している。古英語期の「海の波の逆巻き」の規模から比較すると、大きな変化である。聖書においては、「熱」や「火」の表現には拡張されなくなったものの、神の恵みを表す‘well of life’の定形表現、またはその異形表現が用いられ、水を飲むことで生命力を得るだけでなく、神の教えを得ること、道徳心の湧き立ち、知識の恵み、知性に優れた言葉が湧き出る (Prouerbs 10:11 *a well of life*)など、イディオムとして定着する重要な表現となった。エリザベス朝時代には、Spenserの叙事詩*The Faerie Qveene*や、Shakespeareの劇作など、様々な文学が花開いた。多様なジャンルにおいて、聖書における‘well of life’のイディオムは用いられており、*fountain*などの中英語期からの借入語にも影響を与えている。

最終章は本研究のまとめと今後の課題についてである。水の噴出表現に関する歴史的変化について、英語作品から具体的に用例を分析することで、まず、根源領域となる字義的意味の変遷を、本研究で明らかにした。その結果、英語作品においては、古英語において中心的に用いられていた自動詞の「海の波の逆巻き」から、中英語期の他動詞化による「熱」による沸き立ちを経て、初期近代英語期に隆盛を迎えた欽定英訳聖書の翻訳から「清らかな泉、聖人の井戸」へと湧き立ちの規模が縮小することを概観した。これに伴い、メタファー拡張についても、古英語期の激しい波のうねりは、破壊力のある「火」へ拡張し、中英語期の「熱」の表現は拷問・地獄の沸き立ちを、初期近代英語の深い井戸の底にはキリスト教の真理・教義の存在が象徴的な意味拡張として見て取れる。また、湧き立ちの縮小化の観点から、「感情」概念における悲しみの涙について、古英詩では屈強な武士が嘆き号泣する姿が描かれたが、時代とともに女性殉教者の涙や、姫や妖精ニンフの流す真珠のような涙のように、新たな人物像の涙も加わるようになった。本研究に不足する点としては、古英語における分析をASPRに収録された作品から行ったことで、韻文を中心とした分析に留まっていることである。通時的分析において、叙事詩と宗教作品に分類をし、その特徴をとらえているが、さらに多くのジャンルを調査することで、より正確な調査結果が得られると考える。また、初期近代英語における調査では、類義語*fountain*および*spring*の分析も加えたが、「水」の概念については噴出の動きだけでなく、‘flow’や‘stream’のように、水平方向の流れの移動もあり、これらの語から、*weallan*および*wyllan*のように豊かに意味拡張をする、タイプ頻度の高い語を調査する必要もある。今後の課題としては、これらの継続研究を行うとともに、欽定英訳聖書の‘well of life’のように、トークン頻度の高い水の噴出表現を英語作品の中から収集することで、借入語への語用の影響や、その後の時代にどのように定着し使用されているか、さらなる変遷を追究したい。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　高森　理絵　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	渡辺　秀樹
	副 査　准教授	早瀬　尚子
	副 査　教授	大森　文子

論文審査の結果の要旨

論文要旨

本論文は、英語作品における液体の噴出を認知基盤としたメタファー表現について、通時的観点から調査を行い、意味拡張の経過を辿ったものである。古英語期の水の噴出表現が複数の意味領域に派生し用いられる作品、叙事詩 *Beowulf* において、「逆巻く水の動き」が「炎」や「強い感情」の比喩として転用されることは、Potter (1988) が、*weallan* と *wylm* を用いる表現を‘tidal metaphor’としてまとめており、Trim (2007)は、古英語において9世紀から10世紀にかけて、概念メタファー＜怒りは膨満＞から＜怒りは熱＞への変化がみられると述べている。

この先行研究に基づき、本論文で取り扱う液体の噴出表現の祖型は古英語の自動詞 *weallan* とその名詞形 *wylm*、他動詞 *wyllan* およびその名詞形 *wylle* である。古英詩全体（約3万行）をコーパスとした初期段階の考察を出発点とし、中英語宗教散文、Spenser, Shakespeare, The Authorized Version などの各時期の代表的韻文作品と宗教文学を資料として、これら動詞・名詞が中英語・初期近代英語において語形がwellへと収斂されていく過程を追い、類語spring, fountainなどとの競合により遂げた意味変化を確認した。用例に見える共起語や文脈の詳細な論考から、字義とメタファー義への意味拡張のパタンを分類し、結果、以下の事実を突き止めた。

英語作品においては、古英語において中心的に用いられていた自動詞の「海の波の逆巻き」から、中英語期の他動詞化による「熱」による沸き立ちを経て、初期近代英語期の欽定英訳聖書の翻訳から「清らかな泉、聖人の（名に因んだ）井戸からの流出」へと湧き立ちの規模が縮小していく。これに伴い感情への拡張メタファー義においても、古英語期に激しい波のうねりが「悲しみ」や「怒り」という激しい否定的感情を表していたものが、中英語期には殉教者・姫・妖精の流す真珠のような涙が表す「悲しみ」を経て、キリストの慈悲心、宗教的意味での「愛」という肯定的感情へと変化した。

各章の内容

第 1 章 「 序 説 」 では、研究の目的、方法、調査対象表現の通時的変化の概要を述べる。研究目的は、水の噴出表現について通時的な意味の変遷を特にメタファー義について辿り、古英語・中英語・初期近代英語における意味拡張の特徴を明らかにすることである。調査方法としては、根源領域となる水概念を意味する語を各時代の作品集から収集し、複数の概念領域への意味拡張について、連語・文脈・作品背景の観点から分析する。水の噴出表現は、古英語自動詞 *weallan* およびその名詞形 *wylm*、他動詞 *wyllan* およびその名詞形 *wylle* であり、これらの中英語および初期近代英語における使用を通時的に調査する。字義的意味の古英語自動詞 *weallan* は「海の波の逆巻き」を表し、中英語から初期近代英語へと時代を経て、他動詞用法およびその名詞形の増加に伴い、波の逆巻きの規模が「泉の湧き立ち」に縮小化する。これに伴い、感情メタファーも激しい感情から、多様な感情を表すようになった。

第 2 章 「 古英語における水の噴出表現とその意味拡張」は、本研究の出発点として *Beowulf* における水の噴出表現を網羅的に調査し、龍の炎、血の沸き返り、拍動する心臓、悲しみや怒りの逆巻き、迫り来る死など複数の概念に拡張して用いられることを確認した。この古英語叙事詩における意味拡張の範囲と比較するため、*The Anglo-Saxon Poetic Records*（以下ASPR）に収録される全ての詩作品について同様の用例収集と分析を行った。*OED*によると他動詞 *wyllan* は自動詞 *weallan* と異なり、古英語由来の語ではなく同族古ノルド語由来の可能性が述べられている。主に熱で沸かす ‘boil’ の意味を表すが、ASPR で他動詞は殆ど用いられていない。一方、その名詞形 *wylle* は海の波より小規模の ‘wellspring 「泉の湧き立ち」’ を表し、Cynewulf 作品や Cædmon 一派の宗教詩において徐々に使用されるようになる。自動詞 *weallan* は、宗教詩において叙事詩と同様「水」の湧き立ちが「火」に拡張するが、作品背景の影響から、「地獄の炎」や、「魂の精錬の炎」を表す表現で用いられる。作品ジャンルの違いから「感情」表現において、英雄叙事詩では戦いにおける「死別の悲しみ」や「敵対する者への怒り」を表したが、宗教詩では「地獄の悲しみ」や「神への愛」を表している。

第 3 章 「 中英語における水の噴出表現とその意味拡張」では、中英語で変化した自動詞 *wallen* および派生名詞 *walm* 、他動詞 *wellen* および派生名詞 *welle* を扱った。他動詞およびその名詞形の頻度が増加する一方、自動詞用法は減少の傾向が見られた。これに伴い古英語期の中心的用法であった自動詞 *weallan* に基づく「海の荒波」のイメージから、「泉の湧き立ち」へと水の噴出規模が縮小化する。The Early English Text Society 刊行の校訂版収録作品中、動詞 *wallen* および *wellen* とこれらの名詞形が用いられる作品を調査したところ、54作品でこれらの使用例が確認さ

れた。中英語作品の特徴として、騎士道作品 (Romances) ではキリスト教の道徳精神が反映され、年代記 (Chronicles) においても同様の特徴がみられる。こうした作品背景から、騎士道精神の湧き立ちとして、‘well of knighthood / worship / honor’ などの「精神」概念への意味拡張もみられるようになる。宗教作品においては、他動詞化の影響から Katherine group などの殉教者を描く作品において、釜茹での拷問の場面を他動詞 *wellen* で表している。宗教作品における他動詞の頻度については、「水」の湧き立ち（全36例中2例）よりも、「熱」による沸き立ち (全36例中15例)のほうが多く用いられ、*wellen* によって拷問や地獄の沸き返りを象徴的場面として描いていることが見て取れる。

第 4 章 「 初期近代英語における水の噴出表現とその意味拡張」では、自動詞・他動詞と名詞形がともに語形 *well* に統一される時期を扱っている。1600年代に入り欽定訳聖書の翻訳がなされ、水の噴出表現にも新たな変化がみられた。聖書における *well* は泉の湧き立ちだけでなく、聖人の名に因んだ井戸も表す。むし欽定訳における「水」の概念の例においては28例中25例が人工の井戸であるため、中英語期の「泉の湧き立ち」から、さらに静かな奥底に潜む静的な動きへとイメージが変化したことが分かった。聖書においては、「熱」や「火」の表現には拡張されなくなったものの、神の恵みによる「命の泉」を表す ‘a well of life’ の定形表現の成立、またはその異形表現が用いられて、水を飲むことで生命力を得るだけでなく、神の教えを得ること、道徳心の湧き立ち、知識の恵み、知性に優れた言葉が湧き出る (Prouerbs 10:11 *a well of life*) など、イディオムとして定着する重要表現となったことは注目されて良い。エリザベス朝時代には、Spense rの叙事詩 *The Faerie Qveene* や Shakespeare の劇作など、様々な文学が花開いた。多様なジャンルにおいて、聖書における‘a well of life ’の定型表現が用いられており、これには *fountain* など中英語期からの借入語も影響を与えた。

第 5 章 「 本研究のまとめと今後の課題」では、4章までの用例を通観し、水の噴出表現に関する歴史的変化について、根源領域・目標領域・字義的意味の変遷をまとめた。英語作品においては、古英語において中心的に用いられていた自動詞の「海の波の逆巻き」から、中英語期の他動詞化による「熱」による沸き立ちを経て、初期近代英語期に隆盛を迎えた聖書の翻訳表現から「清らかな泉、聖人の（名に因んだ）井戸」へと湧き立ちの規模が縮小する変化が確認された。メタファー拡張については、古英語期の激しい波のうねりの破壊力のある「火」への拡張、中英語期の「熱」の表現の拷問・地獄の沸き立ちへ、初期近代英語の深い井戸の底のキリスト教の真理・教義の存在への象徴的な意味拡張が典型である。湧き立ちの縮小化の観点から「感情」概念への拡張を見れば、古英詩では wylm が屈強な武士が号泣する姿に用いられたが、時代とともに女性殉教者の涙や、姫や妖精ニンフの流す真珠のような涙のように、新たな人物像も加わるようになる。

本研究の問題点、残された課題としては、まず古英語における分析が韻文のみに留まっていることである。通時的分析において、叙事詩と宗教作品に分類をし、その特徴をとらえているが、さらに多くのジャンルを調査することで、より詳細な調査結果が得られるだろう。これらの継続研究を行うとともに、欽定訳聖書の ‘a well of life’ のように頻度の高い噴出表現を英語作品から収集することで、借入語への語用の影響や、その後の時代にどのように定着し使用されているか、さらなる調査が残っている。

評価

以上の論旨を持つ当該論文は認知言語学の手法で「概念メタファー」理論に基づいた言語学的論文である。しかも通時的観点に立ち、古英詩から中英語宗教散文、初期近代英語期の叙事詩 *The Faerie Queene*、Shakespeareの戯曲、『欽定訳聖書』まで、各時期の代表的な作品をコーパスとして、各作品の代表的版本を定本にして用例を集めた文献学的労作でもある。今や電子化された古英語・中英語作品は多いが、それらを用いて、作品自体は読まずに用例を集めた研究ではない。6年間に渡る用例調査収集の努力によって、新知見を幾つか提供する歴史的意味論研究論文ともなっている。認知意味論では、今世紀になって中世英語の感情研究が一大分野となってきたが、古英語の「怒り」についてや中英語の「罪の概念について」など時代を限定しているものがほとんどで、この潮流の中でも通史的な論文は数少ないのである。審査員・最終試験担当者はここを高く評価する。

本論文を端的に纏めれば「波の逆巻き」を字義で意味する古英語の動詞・名詞 *weallan*/*wylm* が近代英語の *well* に収斂変化する過程で字義が「泉の噴出・井戸水の流出」に縮小し、比喩的意味も「炎上」や「激しい感情の高まり」から「悲しみ・愛情の湧出」に変化した」となろう。

ただし改善すべき点はいくつかある。論文の英文については、同一語句の頻用など稚拙な表現や人名・年代等の誤記が散見され、十分に文脈を説明された使用例がある一方、それが不十分な用例も多々ある。図表の表示も円グラフも含めて白黒では分かりづらいものがあり、少ない数値の用例をグラフで百分率を示す必要があるのか、これも再考が必要だ。

しかしこれらは、論述内容を損なう程度のものではない。今後、本論文を出発点として、幾つかの単独英文論文が発表されることが期待される。

以上の諸点より、当該論文は、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿のチェックを終えていることを申し添える。